

美的生活のヒント

笹岡 隆甫
未生流笹岡次期家元

① うつむいたらあかん

暑い夏の日の家元の稽古場。

あれは、たしか私が小学校に入学した年のことでした。

目の前には、私が剣山にさした1本の黄色いヒマワリ。でも、そのヒマワリは、なんだか元気がありません。

「うつむいたらあかん！ うつむいた花は、いけたらあかん」。

家元である祖父は、幼い私にそう声をかけました。

私がいけたヒマワリは、だらりと頭を垂れていたのです。私は、祖父の言葉通り、下を向いていたヒマワリの顔を反転させ、太陽の方に向けて、剣山にさしなおします。すると、そのヒマワリは、驚くほど力強くいきいきと輝き出したのです。

「うつむいたらあかん」。

それまでは遊び半分で花をいけていた私が、祖父からはじめて教わったいけばなの技です。

私の祖母は、夏のよく似合う、ヒマワリのような人でした。

太陽に顔を向けて咲くヒマワリのように、いつも元気で前向きでした。私が大学生に入学した年に、若くして病気で亡くなりますが、その最期のときまで、決して涙を見せず、逆に、まわりの家族を元気付けてくれるような明るく活発な人でした。



闘病中の祖母は、ある日、「みんなで温泉に行こう」と言い出し、それを実行しました。担当医に外泊届を押し付け、石川県の和倉温泉まで、家族そろって2泊3日の旅をしました。祖母の車椅子を交代で押しながら、みんなで過ごした3日間は今でも大切な思い出です。祖母は、人生を楽しもうという強い意志の持ち主でした。

「うつむいたらあかん」。

祖父のこの言葉通りの、美しい生き方を貫きました。

いけばな教室で学ぶのは、「生活空間を美しく彩るコツ」。それは同時に、「私たちが美しく生きるためのコツ」でもあります。

あなたの日々の暮らしを、より一層キラキラと輝かせるための「美的生活のヒント」。

私が幼いころから触れてきたいけばなの世界から、あなたに発信できれば幸いです。

② 人を刺す枝

ある日、クリーニング店で、こんなやり取りを目にしました。

私の後ろで順番待ちしていた年配の女性は、かなりイライラしている様子。後ろから、店員さんに向かって「今日は、一人しかいないの？」と声をかけます。「お先にどうぞ」とお譲りしたのですが、こちらにはお礼の一言もなく、「おたくの店はどうなってるの!」。ものすごい剣幕で店員さんにつめよっていました。

どうやら、前に頼んだ洗濯物の畳み方が悪かったらしいのですが、もう少し言い方があるのではないかと思うような、きつい態度でした。他人に対してけんか腰で接している人を見ると、決して気分のよいものではありません。

自分では気がついていませんが、嫌な目にあったり、非難されたりしたら、あるいは私もそういう態度をとってしまっているかもしれません。

そんなことを考えていると、「人を刺す枝」というのが禁忌にあげられていることを思い出しました。禁忌とは古くから禁止されているいけ方のことで、江戸時代には「三十六ヶ条禁忌」が定められました。

その一つである「人を刺す枝」は、鑑賞者に向かってまっすぐ突き出ている枝のこと。鑑賞者を指差すように突き出た枝があると、まるで自分の目を突かれているようで、嫌な気分になります。そこで、こういう非礼な枝は、取り除くのが決まりです。

私たちの普段の生活に照らしあわせば、相手にけんかを売るような態度がこれにあたります。くってかかるような態度で人と接していたら、きっと周りのみんなに敬遠されるでしょう。

禁忌は、そんなことにも気づかせてくれる大切な教え。人を刺す枝を取り去ったいけばなのように、私自身も他人に対する非礼を取り去り、誰に対しても丁寧な態度で接することができるよう心がけたいものです。

③ コーヒーはいかが？

「まあ、座ってコーヒーでも飲みい」。

家元事務局にお客さんが来られたら、祖父である家元は決まって、そう声をかけます。この第一声、家元のコーヒー好きが一つの理由ですが、私はいつもこの言葉を聞いて「いけばなって、このコーヒーみたいものだなあ」と感じています。

一見何のつながりもないように思える、コーヒーといけばな。これらは、同じ役割を担っています。

現在、日本文化と呼ばれているものの多くは、室町時代に生まれています。この室町という時代は、日本の歴史の中で特別です。なぜなら、平安時代の天皇や江戸時代の将軍のような、絶対的な中央権力というものが存在しなかったから。権力を握っていたのは、公家、武士、寺社とさまざまでした。いろんな人たちが、それぞれに力を持っていたので、ちょうど今の国際社会と同じで、外交が大きな役割を果たします。争いを起こさないためには、相互のおつきあいが不可欠だったのです。

みんなが仲良くやっていくために、「会所」と呼ばれる接客の場が生まれ、お客さんを迎えます。でも、単に接客するだけじゃつまらない。せっかく集まったのだから、「みんなで遊びましょう」ということになります。寄合をするのです。そこで、花や茶や香を使ってみんなで遊んだのが、現在の華道、茶道、香道のはじまりです。

いけばなは生まれながらにして、人と人との関係を円滑にする役割を担っていました。いけばなもコーヒーも、人と人が仲良くなるため

の潤滑油なのですね。

④ アシンメトリー

髪の毛の左右の長さが違うアシンメトリーのデザイン。洋服やアクセサリ、靴なんかでも、アシンメトリーのデザインは結構見かけます。ちょっとくずした感じが目を引きますね。

アシンメトリーとは、左右対称を意味するシンメトリーの反対語。最近、流行のデザインとして注目されていますが、実はこのアシンメトリー、すでに万葉の昔から日本人が好んでいたデザインなのです。

昔のお寺にも、アシンメトリーのデザインを見つけました。例えば、奈良の法隆寺では、向かって左に尖った五重塔、右に四角い金堂が並んでいます。こんな風に、左右でバランスが違うのも、意外と目に心地よいものです。

いけばなでも、このアシンメトリーが、デザインの鉄則の一つ。室町時代に書かれたいけばなの伝書には、「右長左短」の文字が見られます。

2本のバラをガラスのコップに入れるとき、あなたはどうしますか？

私は、「右長左短」をお勧めします。1本目は長めに切って、少し右に傾けて挿しましょう。反対側は、短め。例えば、1本目の半分くらいの長さにして、左に傾けて入れます。左右の長さを変えてやれば、趣のあるアシンメトリーの作品のできあがり。

自然界に、左右対称は存在しません。人間だって、右顔と左顔は違いますし、心臓は左胸にあります。それに、長所もあれば、短所だってある。

でも、きつといけばなも人間も、不完全だからこそ、味わいや深みといったものが感じられるのでしょうか。

完全でないからこそ、おもしろいのです。

⑤ レス・イズ・モア

建築では、デザインと構造が、同じように大事です。私が、高校時代に好きだった科目は、美術と物理。ちょうど、この二つが生かせるということで、大学では建築を専攻しました。

大学の授業で初めて作った模型は近代建築の代表作、バルセロナ・パビリオンでした。発泡スチロールの両面に白い紙を貼ったスチレンボードを主材料に、1/100の模型を組み立てていきます。

なぜか、みんな徹夜で製図室にこもり、我先にと仕上げたものです。今思えば、なぜお昼に作業しないのか不思議ですが、もちろん私も例外ではありませんでした。

完成したら、その模型を製図版の上に置きます。いざ、バルセロナ・パビリオンを体感してみましよう。自分自身が1/100のミニチュアの人間になったつもりで、模型の床面から1.5cmの高さに視点を保ったまま、模型の中をどんどん進んでいきます。

左手の壁に沿って進んでいくと、突如、今まで隠されていた長方形の大きな池が現れ、さらに数歩進むと池に浮かぶ美しい立像が目の前に飛び込んでくるではありませんか。壁と天井だけで空間が仕切られ、ドアも窓もないシンプルな建築なのですが、豊かな空間が、そこにはありました。

このバルセロナ・パビリオンでは、壁の長さや池の配置、そして像の位置に至るまで、そのすべてが厳密に計算されていたのです。そこには、不要なものは一つもありません。

この建築を手がけた巨匠ミース・ファン・デル・ローエのデザイン論はLess is more。つまり、「厳選されたより少ない素材で、より豊かな空間をつくる」という考え方です。これはまさに、いけばなのデザイン論そのものです。

ありったけの木や花を、とりあえず壺に放り込んだだけじゃない？ たまにそんな花を目にしますが、これはいけばなではありません。

例えば、1本のカエデの木が生えている姿を思い浮かべて下さい。たくさんの葉が重なり合っています。これをそのまま器に突っ込んだのでは、葉が重なってボテッとした緑の塊になってしまい、手のひらのような形をした一枚一枚の葉の形が全く見えない。カエデらしさが見えてこないのです。

だから、私は重なる葉をどんどん切り落とし、残った葉のまわりに空間を作ります。100枚の葉があっても、残るのはたった20~30枚。そこまでそぎ落としてこそ、カエデ本来の葉の姿がはっきり見えてくる。

そうやってそぎ落としたカエデは、一枚一枚の葉がリズムカルに、豊かな空間を演出しています。

Less is more. 近代建築の手法といけばなの手法には、思わぬ共通点がありました。

⑥ 花の黄金比

モデルのように顔立ちの整った人を見ると、誰もが美しいと感じますが、これって実は不思議ですね。なぜ、みんな同じ人を美しいと感じるのでしょうか。きっと、誰が見ても美しいバランスというのがあるのでしょうか。

誰もが美しさを感じるバランスと言えば、黄金比が有名です。美人の目や鼻の配置、美しいと感じる建物のプロポーションには、決まってこの比率が現れます。

しかし、私は日頃、この黄金比ではなく、白銀比と呼ばれる比率をよく使います。黄金比は、正五角形の一辺と対角線の比率で、白銀比は、正方形の一辺と対角線の比率。図形の苦手な人にはちょっとわかりにくいので、身近なものでたとえると、タバコの箱の縦横比（約60%）が黄金比で、コピー用紙の縦横比（約70%）が白銀比。黄金比の美しさは動的で、白銀比の美しさは静的です。

自然の植物の葉の配置には、黄金比が見られます。だから、自然の植物は、動的で、生き生

きとした命を感じさせます。しかし、私が花をいけるときには、静的な白銀比を使うのです。

枝を何本か入れる場合には、それぞれの枝の長さを変えるのですが、その長さを白銀比で決めていきます。1本目の枝が10だとすると、次の長さは70%の7、その次はさらに70%の5といった具合に、白銀比を使えば、枝の長さが自動的に決まっています。白銀比を使っていけばなれば、誰がいけてもバランスのとれた作品がいけられるというわけです。

いけばなでは、植物の生命をそのまま見せるのではなく、あえて静かで落ち着いた花姿にととのえます。そうやって、白銀比に彩られた花は、静けさの中に命の炎が見え隠れしています。熱い想いを内に秘めていても、決してそれをひけらかさない、日本人の美意識がそこに現れています。

⑦ 梅は梅らしく、桜は桜らしく

「今は花と言えば桜を指すけれど、万葉のころは花と言えば梅だったんだよ」。

私は、北野天満宮にお参りすると決まって、こう教えてくださった高校の古文の先生の顔を思い出します。この神社は、私の高校のすぐ近くで、境内には2000本もの梅の木が植えられているからです。

この梅と桜、「よく似ているので違いがわからない」という人が意外に多いようです。植物の分類でいうと、どちらもバラ科サクラ属。梅と桜の違い、あなたならどう説明しますか？

私の答えは、「梅はおじいさん、桜はお嬢さん」。梅の花にはふくいくとした香りがあり、枝が折れ曲がっているのが特徴。屈曲した枝が、気難しいおじいさんといった印象を与えます。これに対して、桜の枝はまっすぐなものが多く、霞と見紛うような花の豊かさが何と言っても目をひきます。やさしい色合いの豊かな花が、年頃の女性を思わせます。

さて、いけばなでは、「交差した枝は、統一

感を乱すので取り除く」というのが鉄則。でも、それぞれの花のよさを最大限にいかすためには、わざとそうしないこともあるのです。

梅は屈曲した枝ぶりがおもしろいので、作品の一箇所に交差した枝を故意に残します。この交差した枝がまるで女という字を描いているように見えるので、「女格（じょかく）」と呼びます。

また、桜をいける時には、「ひと枝だに惜しまるる」と言われます。豊麗な桜花の美しさに敵うものはないのだから、花のついた枝はたとえ一本でも大切に扱うように、という先人の教えです。できる限り花がたくさん入るように多少の交差は許容していけあげよ、というわけです。

梅は屈曲した枝ぶりをいかし、桜は豊かな花を見せる。いけばなでは、このようにその花の持つ長所を上手にいかすことを大切にしています。

仕事でも恋愛でも、相手に気に入られようと、型にはまった特徴のない人間になってしまっただけはつまらない。自分の長所を充分にいかして、自分らしく生きたいですね。

⑧ 花を殺して、人を活かす

「華道家が、花や木を切って自然破壊をしているのは、環境重視のこの時代に逆行しているよ」。

そんな指摘を受けることがよくあります。

人間は自分達が楽しむために花を切っている。確かにある意味、そう言えるのかもしれませんが。でも、華道家は、たとえば自己を表現するためのだけに、ただいたずらに花を切っているわけではありません。

想像してみましよう。病気の母親のために、太陽のように明るい1本の黄色いガーベラを買ってきて飾る。そんな時、たった1輪の花から、どれほどの幸せが広がることでしょうか。母のほほえみは、何物にも代えがたいものです。

花には申し訳ないのですが、犠牲になってもらったおかげで、母にいのちの息吹を吹き込むことができるのです。つまり「花を殺して、人を活かす」。

確かに、華道家は、花の犠牲なくしては存在しえません。だからこそ、私たちは花の命を犠牲にしていることを、決して忘れません。

大正生まれのある高弟の先生の言葉です。

「いけばな展が終わった後、花がしおれても、その場で捨てることはしません。私は、必ず一度家に持ち帰るんですよ。感謝の気持ちを込めてお酒で清め、半紙に包んで捨てるのです。寂しくて涙が出る時もあります」と。優しいお人柄の先生らしいひと言です。

華道家に限らず、人間という生き物は、動物や植物の犠牲なくして存在しえません。われわれは、食べることなく生きてはいけないのですから。

私たち人間は、自分の力だけで生きているような傲慢な錯覚によく陥りがちですが、実は動植物をはじめ、森羅万象に「生かしていただいている」のです。

だから、私たちは、小さな生き物たちの命に対する感謝の念を込めて、食事の前にそっと手をあわせるのです。

だからこそ、私たちは、花を生けた後、親しい人を亡くした後のように、ねんごろに供養するのです。

⑨ 東西の花芸術

ここで、東西の花芸術の違いを、少しまとめておきましょう。

西洋のフラワーアレンジメントは、「面」を大事にします。例えば、真紅のバラの花を敷き詰めて、花の絨緞を作る。花の持つ色彩の美しさを強調するために、「どンドン花を足してマッス（塊）を作る」。これが、西洋の「足し算」の技法です。

これに対して日本のいけばなでは、「線」を

大事にします。例えば、雑木林をそのまま、家の中に持ち込んでもいけばなにはなりません。交差している枝がたくさんあって、1本1本の枝ぶりが見えないからです。そこで1本の花枝が持つ線のおもしろさを見せるために、「重なっている枝をどんどん取り去る」。これが、いけばなの「引き算」の技法です。

西洋のデザインは、「シンメトリー（左右対称）」が基本です。これは何も、フラワーアレンジメントに限ったことではありません。西洋のベルサイユ宮殿を思い浮かべてみましょう。左右の均整がとれた建築、四角形の区画が左右に整然と並んだ庭園。几帳面なほど、線対称の配置になっています。西洋では、安定したシンメトリーが美しいと言われます。

対する日本のデザインは、「アシンメトリー（左右非対称）」が基本です。奈良の法隆寺を思い浮かべてみましょう。つんと伸びた五重塔とぼつたりとした金堂が左右に並んでいます。日本では、不安定なアシンメトリーが美しいと言われます。人間だって、右顔と左顔は違いますし、心臓は左胸にある。不均衡だからこそ、味わいや深みを感じられると考えたのです。

もう一点、西洋のフラワーアレンジメントは、作り上げたときが最高の状態になるようにとのえます。そこにあるのは、鑑賞者に最も美しい姿を見せたいという強い願い。ただし、花の姿が変わると、その美しさは壊されてしまいます。時間経過が、安定した美しさを壊してしまうのです。

対する日本のいけばなは、どの瞬間が一番というのはありません。いけばなとは、その花の命を見つめること。つぼみ、花の盛り、そして散った花...。命は、どの瞬間も同じように尊く、かけがえのないものです。日本人は、時間経過とともに移ろいゆく命の輝きを最期まで見届けます。

参考文献

笹岡隆甫『美的生活のヒント』（2007年、マガジンハウス）

講演者略歴

華道「未生流笹岡」次期家元。1974年京都生まれ。3歳より当代家元笹岡勲甫の指導を受ける。1985年祇園祭長刀鉾稚児。1997年京大工学部建築学科卒業。1999年京大大学院修士課程修了。2000年京大大学院博士後期課程を中退し、華道に専念。狂言やミュージカルの舞台を「いけばなパフォーマンス」でいけあげるなど、舞台芸術としてのいけばなの可能性を追求。「平成教育委員会」で最優秀生徒賞を獲得するなど、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等でも、いけばなの普及に努める。茂山宗彦（大蔵流狂言師）、chori（詩人、茶道裏千家家元の長男）とともに、「京の御三家」（SmaSTATION!!）、「京のプリンス」（関西テレビ京都チャンネル）と呼ばれる。著書に『美的生活のヒント』（2007年、マガジンハウス）。